

## <書評>

### ブハーリン再評価の試み —スティーヴン・F・コーエン『ブハーリンとボリシェヴィキ革命、政治的伝記：1888～1938』を読んで—

小 山 洋 司

#### I

革命後60余年たったソ連の経済的な達成を認める人にとっても、ソ連はあまり魅力ある存在ではない。われわれが不満を感じるのは何よりもその非民主主義的かつ官僚主義的側面である。こうした問題は何に由来するのだろうか。ブルジョア民主主義的伝統を欠いた革命前ロシアの社会・経済的後進性によって社会主義建設が制約されたということもある程度言えよう。しかし、十月革命がそれを克服していく可能性をきりひらいた点を見落してはならない。ソヴェト史を見るさい、十月革命と今日のソ連をストレートに結びつけて見るわけにはいかない。その間に歴史上の屈折ないしはジグザグがあったと考えられるからである。その問題を考える場合、とくに1920年代が注目される。1920年代においてはもちろん客観的諸条件に制約されて選択の幅は狭かったといえ、発展のいろいろな可能性があった。当時、ソヴェト・ロシアの民主的発展の方向を代表していた最も重要な人物がブハーリンであった。

ニコライ・イワノヴィチ・ブハーリン（1888—1938年）は若くしてボリシェヴィキ（ロシア共産党）の指導者の一人となり、レーニン死後はロシア共産党最大の理論家であった。彼の理論的著作は非常に多いが、なかでも有名なのは『有閑階級の経済理論』、『帝國主義と世界経済』、『過渡期経済論』、『共産主義ABC』（プレオブラジェンスキーとの共著）、『史的唯物論——マルクス主義的社会学的一般的教科書——』、『スターリン＝ブハーリン著作集』である。彼はまたコミンテルンの指導者として国際共産主義運動を指導した。いまでこそ、ブハーリンの名前を知っている人は少ないが、コミンテルンの議長として戦前とくに1920年代、日本の左翼に与えた影響は大きかった。彼の著作は早くから翻訳され、「レーニン以上に多くの読者をもっていた」<sup>(1)</sup>。年輩の人たちの中には彼の『史的唯物論』によって共産主義者としての洗礼をうけた人もいと聞く。ブハーリンは「人民の敵」として1938年に処刑されて以来、まだ名誉回復されていない。フルシチョフ時代、もう少しで名誉回復されるところまでいったが、はたされなくてそのままになっている<sup>(2)</sup>。しかし、ブハーリンは民主主義的な社会主義を構想し、その実現に努力した人物と

して再評価さるべきである。

以下に紹介する著作は最近、西側で出された本格的なブハーリン研究である（原書は **Stephen F. Cohen, Bukharin and the Bolshevik Revolution : A Political Biography, 1888-1938, Alfred A. Knopf, N. Y. 1973.** 邦訳はスティーヴン・F・コーエン／塩川伸明訳『ブハーリンとボリシェヴィキ革命、政治的伝記：1888～1938』未來社、1979年）。なお、著者スティーヴン・F・コーエンは現在アメリカのプリンストン大学の政治学担当准教授である。著者は、ボリシェヴィキ革命とソヴェト史の形成期を再検討する一つの手段としてブハーリンを研究している。

本書の構成は次のとおりである。

- 第一章 ある古参ボリシェヴィクの形成
- 第二章 急進主義の勝利——1917年
- 第三章 内戦期の政治
- 第四章 マルクス主義の理論とボリシェヴィキの政策——ブハーリンの『史的唯物論』
- 第五章 ボリシェヴィズムの再考
- 第六章 ブハーリン主義と社会主義への道
- 第七章 二頭政治——共同指導者としてのブハーリン
- 第八章 穏健主義の危機
- 第九章 ブハーリンの没落とスターリンの革命の到来
- 第十章 最後のボリシェヴィク
- 終章 歴史におけるブハーリンとブハーリン主義
- 訳者解説 ブハーリン理論とネップ期のソ連社会

## II

まずはじめに政治的動きを簡単にフォローしてみよう。著者コーエンは、ブハーリンの伝記を語るにあたって冒頭に2つの「永く続く神話」を批判する。その1つは、ボリシェヴィキ党の指導部は他の党とはちがって一体で、均質で、心をつににした男女の集まりだったという伝説である。これは著者によれば、権力を取るという決定さえもが、党内の不一致の見事な一例であって、レーニンの最古参の仲間の多くによって激しく反対され、一時は否認されたのであり、また、ソヴェトの20年代の広範囲にわたる綱領的論争のあいだ中、ボリシェヴィキ党内の不一致という型はずっと続き、強まっていったのであり、ただ存亡の必要から一時的に課された短期的統一があったにすぎないのだという。20年におよぶ党内闘争、そして30年代のスターリンの同胞相争う血の粛清とが過ぎ去ってから、一枚岩のボリシェヴィキ党指導部という神話は、ようやくもう一つの、部分的により正しいにすぎない神話にとって代わられたという。その神話というのは、ボリシェヴィキ運動は初

めから根本的二元性によって特徴づけられていたというものであった。それによると、党内には一方の側には、インテリ党员で、1917年以前に外国で暮した経験があり、西欧の政治的・文化的伝統を吸収しており、ポリシェヴィズムと西欧社会主義との結合およびその国際主義的衝動を代表している「西欧派」ポリシェヴィキ、他方の側には、革命前にはロシアにとどまっていた、地下組織を動かしており、観念よりも組織的政治活動にたけており、プラグマチックで、伝統的な社会主義的価値にはあまり頓着せず、ポリシェヴィキの民族主義的傾向および革命後の党官僚制の萌芽を代表している「土着派」党员、という二つの対立する潮流が共存していた。そして、ポリシェヴィキ政権の初期には西欧化されたインテリが党指導部を支配していたが、20年代末に彼らは「土着派」——スターリンに指導され、彼を人格的象徴とする党官僚——によってうちまかされ、追放されたというのである。しかし、このような見方は、著者によれば、やはり欠陥がある。たとえば、西欧志向のインテリの間には基本的な見解の一致があるかにとらえているけれども、本当はその正反対であって、革命の前夜、「西欧派」党员には多くのタイプのポリシェヴィキがおり、それと同じくらいたくさんのポリシェヴィズム観があったのだとして、著者は批判する。

結局はポリシェヴィキはどういうものであったのか。著者に言わせれば、「民主集権制」として知られる政治的・組織的統一性のみせかけの背後には、ポリシェヴィキの一致した哲学あるいは政治イデオロギーなどいうものは——1917年においても、その後数年間も——存在しなかったのであり、伝説とはちがって、党はイデオロギー的に——あるいは組織的にさえも——一枚岩であったというよりも、むしろ「グループ、集まり、分派、『潮流』」などの協定による連合体」であった、ということになる。

以下、ブハーリンを中心にロシア史を見ていこう。1888年10月、モスクワで小学校教師の夫妻の次男として生れたニコライ・イワノヴィチ・ブハーリンは知的・文化的な雰囲気のもとで成長した。両親と一緒にベッサラビアで過した4年間を別とすれば、彼は終始モスクワで生活した。彼はモスクワっ子であった。彼は早くも1905年にその政治的経歴を開始した。1905年革命はロシア社会をゆすぶった。この年の熱病的騒擾は、ブハーリンや同様の傾向をもった一世代の生徒たちをギムナジウムからひきずりだして、本物の革命的政治運動の土俵におしだした。ブハーリンは社会民主党の運動と接触するや、すぐ戦闘的なポリシェヴィキ派に加わった。この革命は失敗に終り、ツァーリズムは体制をたてなおし、反動の嵐がふきあれるようになった。しかし、1906年後半、17歳のときにブハーリンは職業革命家になり、党によって非合法活動を保護され、主にポリシェヴィキの組織者、宣伝家として活動した。1907年秋にモスクワ大学（法学部経済学科）に入学した。一日中党活動をすることと、時おり大学生として姿をあらわすことは全く両立可能だった。1908年、20歳にして彼はロシア最大の都市モスクワの第一級のポリシェヴィキ指導者になった。社会民主党の退潮期にあって、党内に「清算主義」、「召還派」、「調停派」の潮流が発生したが、彼はこれに反対してモスクワ党組織を守った。ブハーリンは党インテリであ

り、しかも同時に「土着派」だったのである。彼は数回警察によって逮捕された。1911年8月、彼は流刑地から脱走し、西ヨーロッパへ亡命し、そして本格的に文筆活動を始めた。6年後に帰国したときには彼は党の公認の指導者、定評ある理論家になっていた。この期間、彼はレーニンとは何度も対立もし、かつ多くの点で協力した。反国家主義の立場でつらぬかれ、ブルジョア国家の「革命的破壊」をよびかけた彼の論文「帝国主義国家の理論によせて」(1916年)はレーニンを激怒させた。だが、両者の仲が最悪だった時期でさえ、心の底には互いに共感があった(以上、第1章)。

1917年2月のツァーリの没落に始まり、10月のボリシェヴィキによる首都ペトログラード奪取に至る間に、ロシアは近代史上匹敵するものない下からの社会革命を経験した。何世代にもわたって公の特権や搾取と抑圧に怨みを抱いてきた大衆——労働者、兵士、農民——は、3年に及ぶ戦争によって急進化した。ボリシェヴィキこそが1917年の急進的世論を一貫して表明し、支持した唯一の主だった政治勢力であり、それゆえに政権掌握に成功したのである。ブハーリンとレーニンの激しい論争点になっていた国家論は、1917年にはレーニンの方が考えを修正し、ブハーリンの反国家主義をとり入れた(『国家と革命』)ので解決された。レーニンがロシアに戻ってすぐ発表した有名な四月テーゼは反国家主義のテーマを政治的綱領にしたもので、党指導者たちの度胆をぬいた。社会主義革命をなしとげるため、レーニンはまず、尻ごみする自らの党を急進化させなければならなかった。この骨のおれる闘争において、ブハーリンはモスクワを舞台として党の急進化に寄与した。この大きな役割が、28歳のブハーリンを年長の先輩を追いぬいて党の最高指導者の一員にまで押し上げたのであり、また、党が政権についてわずか3カ月後には、ブハーリンがレーニンの政策に反対するボリシェヴィキ左派(ドイツとの講和をめぐる)の指導者となるに至る背景を説明している(第2章)。

1918年6月に内戦が始まった。1921年の内戦の終了まで、ボリシェヴィキはロシアおよび外国の反革命的軍隊に対して、ソヴェト・ロシアの政府として生きのびるための死にもこの狂いの闘争を続けていた。この間、ブハーリンは『プラウダ』の編集長として働くと同時に、国際共産主義運動にも関わるようになった。コミンテルンの創立(1919年3月)を準備し、創立されてからは執行委員およびその組織を統轄する「小ビューロー」の副議長として活躍した。正式の国家的地位をもたなかったにもかかわらず、正直、公正、清廉という人柄を買われて、もめごとや誤りがあったときに政治局から調停や手直しのために派遣されるという役目を負っていたようである。しかし、それ以上に重要であったのは理論家としての役割であった。ブハーリン自身の言葉を借りれば、マルクス主義者は最も激烈な階級闘争のさなかでも理論活動をやめることはできないのであって、多忙な職務のかたわら戦時共産主義を正当化する一連の著作をやつぎばやに書いていた(第3章)。

1921年、ボリシェヴィキは内戦に勝利したものの、未曾有の経済崩壊により国は破滅に瀕していた。戦時共産主義の経済政策にかわってネップ(新経済政策)の採用を余儀なく

された。ネップは党の政策における大きな転換点をなしているが、戦時共産主義同様、あらかじめ考えられていた計画に従って発展したわけではなかった。戦時共産主義を持続的な政策、社会主義への直接的な道とみなして熱心に推進してきたポリシェヴィキにとって、ネップは大きな挫折を意味したが、やがてネップを後進国ロシアにおける社会主義建設の有効な政策というぐあいに積極的に評価する者が出てきた。その代表者がブハーリンであった。

ポリシェヴィキ内部の潮流にかんして、著者コーエンはたいへん興味深い観点をうち出している。すなわち、1921年以後のポリシェヴィズムは、2つの衝突しあうイデオロギー的（または感情的）伝統に分岐した運動であった。第一は、「革命的＝英雄的」とでも呼べるべき伝統（革命的ロマンティズム）で、1917年10月の勇敢な蜂起と内戦期の勇壮な革命の防衛とによって正当性を得、鼓舞されていた。これらの成功は、「急襲」こそがポリシェヴィキの根本的な行動様式であるということを確認しているかにみえた。もう一つの伝統は、より慎重かつ穩健な伝統（慎重なプラグマティズム）で、1921年以前にはかすかにしか表明されなかった。だが、ネップ導入に伴って、この伝統は成長し、大っぴらに漸進的・改良的なものとなった。ネップの慎重なプラグマティズムは革命的ヒロイズムの正反対であった。ある限定された意味では、ポリシェヴィズムのこの二面性はマルクス主義そのものの二元性（主意論と決定論）を反映するものであった。ソヴェトの20年代においては、この2つの伝統は党の左翼と右翼に反映されることになる、というのである。さらに、英雄的伝統と密接に結びついて、20年代を通じて党の思考の周辺にまつわり続けた2つの観念、第三革命の夢とテルミドール（反革命）の幽霊があった、という。

レーニンは1924年1月に死亡した。レーニンの無二の権威ある存在のおかげで、政治局は統一の外見を保っていたが、それも1922年5月のレーニンの最初の発作までであって、それ以来、政治局の多数派をめぐり——そして不可避免的に、同輩中の第一人者の位置をめぐり——暗闘が始まった（第5章）。

5人の「権威ある」レーニンの継承者、あるいはスターリンの表現を借りれば「ヒマラヤ」がいた。トロツキー、スターリン、ジノーヴィエフ、カーメネフ、ブハーリンである。著者コーエンは、レーニンの継承者の地位を正当化する4つの信任状について論じている。5人ともその4つの信任状を何らかの形で組みあわせてもっており、その資格を得ていた。4つの信任状とは、(1)1917年以前も以後もレーニンの内輪のサークルに属していたこと、(2)革命的＝英雄的の経歴、特に1917年が試金石であった、(3)一流の革命的国際主義者であること、(4)「すぐれたマルクス主義者」として認められていること、つまり理論家であること、であった。どの寡頭指導者の信任状も満点ではなかった。ジノーヴィエフとカーメネフ（彼らは二人一組と考えられていた）は(1)については最高点だったが、(2)については、1917年の蜂起に反対したことで最低だった。他方、トロツキーは(2)と(3)にかけては並ぶ者がなく、(4)についてはブハーリンに劣るのみであったが、(1)に関しては入党が遅

いという致命的な弱点をもっていた。ブハーリンの信認状はどれも欠陥はなかった。理論にかけては誰よりもまさっており、1917年の活躍でも国際主義者としても第一級であった。しかしジノヴィエフのように1917年以前からのレーニンの助手ではなく、17年以後も彼のように忠実だったわけではなかった。スターリンの信任状は一番見ばえのしないものだった。(3)と(4)については全く取るにたらず、(2)に関してはトロツキーとブハーリンよりも低い点だった。

後継者争いは時によって異なった主流派と反対派との間で演じられた。1923—24年は、ジノヴィエフ、カーメネフ、スターリンの三人組対トロツキー。1925年には、スターリン、ブハーリン対ジノヴィエフ、カーメネフ。1926—27年には、同じ主流派に対しトロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフの合同反対派。1925年以降、ブハーリンはスターリンとならぶ共同指導者であった。一般的にいつて、ブハーリンとスターリンとの間には大まかな分業があった。つまり、政策定式化と理論はブハーリンがうけもち、組織的腕力はスターリンがふるったのである(第7章)。

ブハーリン、リュコフ(首相)、トムスキー(全連邦労働組合中央評議会議長)らの右派の権威、大衆の人気は絶大であった。彼らの政治的力は表面上は大したものであった。首相職、党の理論的権威とイデオロギー機関、コミンテルン、労組、等、革命的権威の主な象徴は彼らの手の中にあつたのである。しかし、これらは「威厳ある」外見上の権力源であつて、真の「実効的な」権力はますますスターリンの党機構に移つていった(第8章)。

ブハーリン＝スターリン連合は長くは続かなかつた。1927年末の穀物調達危機ならびにそれに対応してとられた「非常措置」がその連合の崩壊をもたらした。農民との同盟を最も重視し、ネップの持続可能性を信じるブハーリン派と、農民の抵抗を押えつけてでも重工業への最大の投資、集団農場・国営農場の創出をめざすスターリン派との間で熾烈な闘争が党の上層部でくりひろげられた。スターリンの主張の中心的なイメージは、精神において軍事的なものであり、内戦のイメージであつた。内戦時の軍事的慣習は、20年代にはネップの改良主義的・漸進主義的原則によって後退させられていたが、完全に消滅したわけではなく、「行政的恣意」や「戦時共産主義の残滓」はその根強さを示していた。よりとらえがたい形では、それは1917年の10月革命の記憶とともに、ボリシェヴィズムの「革命的＝英雄的」伝統のうちに生き続けていた。スターリンはこの伝統をよみがえらせ、党＝国家をその精神で改造し始めた。1929年4月までにブハーリン派は事実上敗北し、29年11月にブハーリンは政治局から追放された。こうして、「4つの信任状」との関連で言えば、最も冴えない人物がいまや最大の権力を握るに至つた。そして1929年12月、党の承認なしに、スターリンの号令で「上からの革命」すなわち「階級としてのクラークの清算」が開始された(第9章)。

政治的に失脚したブハーリンは科学技術の分野に転出し、アカデミー会員にもなり、政

治的には重要ではないが、意味ある仕事をおこなった。1934年には政治的に返り咲いた。中央委員から候補に落されたものの、政府機関紙『イズヴェスチヤ』の編集長に任命された。1936年12月に公布された新ソヴェト憲法（「スターリン憲法」と呼ばれる）はブハーリンが準備したものであった。しかし肅清の嵐の高まる1937年、ブハーリンは逮捕され、「人民の敵」の烙印を押されて1938年3月15日銃殺刑に処せられたのである（第10章）。

### III

次に、今日われわれが学ぶべき（あるいは見直すべき）ブハーリンのマルクス主義への理論的貢献について見ていこう。

ブハーリンが活躍したネップ期はどんな時期であったのであろうか。著者コーエンの特徵づけによれば、後に続いたスターリン体制に比べてネップ——ソヴェトの1920年代——の決定的な特徴は、一党独裁の権威主義的枠組の中かなりの社会的多元主義（pluralism）が存在したことであった。また党は、社会生活の他のすべての領域も独占してはいなかった。実際、政治システムにおいてさえ、下級および行政レベルでは非党員の人間や考え方が大規模に参加することが奨励されていた。党がその気になれば独占することもできたような微妙な領域においても、非ボリシェヴィキが大きな役割を演じた。こうした状態はネップの和解的精神をも反映していた。しかし、ネップ社会の多元性の最も正しい反映は、文化的・知的生活——これこそ常に、本物の多様性と国家の寛容とのバロメーターである——の中に求められるべきである。党自体の知的生活においても、アカデミックな機関、協会、学術出版においても、教育や科学から法、哲学、歴史学に至る社会理論における熱心な論争においても、1920年代は押しつけられた無味乾燥な正統主義の時代ではなく、対立しあう理論や競合する学派の時代であり、一種のソ連におけるマルクス主義思想の黄金時代だった。さらに、ネップは国内平和、政治的安定、経済復興をもたらした。しかも、それはボリシェヴィキの政治的独占を維持しながらであり、また住民間の党の権威と影響力を拡大しながらであった。そのうえ、革命によって開始された進歩的な社会立法——福祉、教育、女性の権利、離婚、妊娠中絶、等における——は1920年代にいっそう発展した。もっとも、これらの成果にもかかわらず、農民的農業の原始的で遅れた状態、都市の失業者といった深刻な問題をネップのロシアは依然としてかかえていたのだが（第9章）。

ブハーリンはこのネップの最大の擁護者・イデオログであった。ブハーリン理論の独自性は次のような点にあると思われる。

① プロレタリア国家の官僚主義的墮落の強調。彼は、国家セクターの拡大を社会主義の前進とはとらえなかった。多くのボリシェヴィキがネップの間中、墮落の危険性について語ったが、そのさい、ロシアのプチブル的経済的基礎およびクラークやネップマンの作用

で資本主義が復活するという形で考えられていた。ブハーリンはその危険性よりも、むしろ生産手段の国家的所有の基礎の上に搾取する組織的階級が現われる危険性を重視していた。実にミロヴァン・ジラスの『新しい階級』が階級のカテゴリーを修正してそれをソヴェト社会に適用するより30年も前に、ブハーリンは「新しい階級」——私有財産に基づくのではなく、「独占的な」権威と特権に基づく——の危険性を警告したのであった。彼は、国家機構への過度の依存に警戒的であって、ある領域においては市場の方が国家より効率的に作用すると信じていた。ここから、社会主義経済における計画と市場の結合という先駆的な考えが出てくるのである。

② 社会的多元主義の承認、非党員大衆のイニシアティブの尊重ならびに説得と教育の重視。ブハーリンは、官僚制の成長はポリシェヴィキ政府と民衆の間にできた「真空」と結びついたものだと考えた。ここから、官僚制に対する解毒剤は、この真空を「幾百幾千の、大小の、急速に広まっていく自発的結社・サークル・協会」——これらは「大衆とのつなぎ目」を提供するであろう——で埋めることにあるという彼の基本的な考えが生まれた。

③ 社会主義への漸進主義的アプローチ。彼は3つの原理を提起した。i「プロレタリアートの指揮下における国内平和」が党の政策としての国内闘争にとって代わらねばならないということ。ii ロシアにおける階級闘争はいまや暴力的に闘われるのではなく、社会主義的経済体と私的経済体との平和裡の市場における競争によって、またイデオロギー戦線や文化戦線で闘われるということ。iii「社会主義への成長転化」の理論。農民経済については、彼はそれを生産過程ではなく、流通過程を通じて——販売組合・購買組合・信用組合を通じて——社会主義的發展の経路に導くことができると考えていた。プロレタリアート独裁のもとでは、ソヴェトの協同組合は社会主義的工業・銀行に依存し、また結びつけられて、不可避免的にプロレタリア経済体の一部、細胞となっていき、何十年間もかかってゆっくりと社会主義に成長転化していこうという見通しをもっていた。

④ 社会の調和的發展。彼は、調和がなければ「社会は成長せず没落する」という一貫した信念をもっていた。工業化論争にさいしては、ブハーリンは左派の理論家プレオブラジェンスキーと論争した。だが、両者は2つの重要な点では一致していた。すなわち、i いずれも工業化を党の第一の目標として受け容れていた。ii 両者はソヴェト工業化は主として国内資源によらねばならないだろうという点では一致していた。さらに、ブハーリンは、工業化が農業部門から国有工業部門への資金移動——農民経済からの「汲み移し」——を必要とするという点にも同意した。本当の対立点は、汲み移しの方法と限度であった。ブハーリンは、工業は拡大していく消費市場に依存するという信念から出発した。この立場に立って、プレオブラジェンスキーの「社会主義的原始蓄積法則」論を、資本の蓄積は社会的消費の水準とは無関係に成長していけると論じたトゥガン＝バラノフスキーの理論に基づいたプログラムだと批判した。ブハーリンはとくに農民市場を重視した。社会



主義的工業における蓄積は、農民経済における蓄積なしでは永くは行なわれ得ないと考えた。かくして、ブハーリンは全農民に向けて、「富め、蓄積せよ」と説いたのである。

しかし、彼の議論にも弱点があった。工業製品への農民需要が確実に増大することが、穀物余剰を確保し、持続的な工業成長を促進するはずであったが、この点が問われねばならなかった。復興期が終り、固定資本の拡大と技術的再装備が中心問題となった20年代後半に入ると、ブハーリンは自分の見解を修正した。重工業優先の工業化の必要性を認め、左派の立場にずっと接近したのである。優先順位を変えたとはいえ、彼は依然として、漸進的でバランスのとれた工業発展を主張していた。

⑤ ネットの枠組の維持。穀物調達危機に直面して、スターリンは非常措置を永続化し、プレオブラジェンスキーの「社原蓄」にいつそう輪をかけた重工業への最大の投資にのり出した。ブハーリンの目から見ると、スターリンがのり出しつつあった路線はまさに「農民の軍事的＝封建的搾取」に基づいた工業化にほかならず、それは国に破局的結果をもたらし、「リヴァイアサン国家」を出現させるものであった。このことを予想したブハーリンはネットの枠組を維持しようとして闘った。

ブハーリンの予想は不幸にして的中した。1930年代初頭のソ連では、重工業の成長とは裏腹に、追放、強制労働収容所、死、農業の停滞、人為的に作りだされた飢饉という光景が見られた。まさに「国家は膨れあがったが、民はやせ細っていた」。ブハーリンとの闘争においてスターリンを支持した政治局員たちのなかからやがて穏健派が現れ、1933—34年、彼らが主導して、穏健なブハーリン的路線を一時的に採用したという事実は、1920年代末におけるブハーリン路線の相対的な正しさを裏づけている。

#### IV

1920年代末、ブハーリンが最も正しい立場に立っていたにもかかわらず、なぜ政治的に敗北したのであろうか。ここではブハーリンの敗北の原因を著者コーエンに従ってまとめてみる。

第1に、書記長スターリンに有利に作用したいくつかの状況のうち最も重要だったのは、闘争の狭い土俵と隠密的性格であった。この状況はブハーリン、リュコフ、トムスキーによって促進されたのであるが、そのおかげで衝突はスターリンが絶大な力をもっている党ヒエラルヒーに限定され、ブハーリン・グループの力——それは上級党指導部の外にあり、実際のところ党そのものの外にあったのである——を無にしてしまった。というのは、ポリシェヴィキ左派は最後まで社会的基礎を欠いた異端的党指導者たちの運動だったのに対して、右派は潜在的な国内の大衆的支持をもった反対派だったからである。右派は農民の大多数、都市の労働者、労組の平活動家、非党員官吏によって、そして多くの黨員によって支持されていた。ブハーリン、リュコフ、トムスキーはスターリンの路線は経済

的に破滅的であるばかりか危険なほど不人気だと確信していたが、にもかかわらず国民の前では沈黙していた。彼らをしばっていたのは、党外での政治は不法なものであり、現実に反革命でないまでも潜在的には反革命だというポリシェヴィキのドグマ、党内論争は非党員聴衆の前で論じることさえすべきではないという公理、言いかえれば「党パトリオチズム」の問題であった。しかしブハーリンはもう一つの考慮によって抑制されていた。マルクス主義者の目からみるならば、彼の政策を最もよく受容すると考えられる社会集団——特に農民と技術専門家——は「プチ・ブルジョワ」であり、従ってポリシェヴィキにとってふさわしくない地盤なのであった。それゆえ、彼らが1928——29年に時おりブハーリン派的感情を示したことは、スターリン派によって攻撃材料としてマイナスの効果もあった。ブハーリンはこうした非難を晴らそうと骨折したが、そのことは彼の手を政治的にしばることになった。結局、ブハーリン、リュコフ、トムスキーは、あまりにイソップ的で力を持たない公けの訴えを別にすれば、彼らの重大な衝突を小さな私的土俵に押しこめることでスターリンに加担し、「党の舞台裏で締め殺され」たのである。

第2に、スターリンの中央党官僚制支配という要因があった。昇進の誘惑から報復の威嚇に至るスターリンの機構のアメとムチは、未確定だった中央委員会の票決にも影響を及ぼした。けれども、著者コーエンはこの要因をそれほど重大視していない。著者によれば、下級官僚は、中央委員会に名を連ねていたとはいえ、1928—29年には二次的な役割を演じただけであった。実際のところ、彼らは、上級の中央委メンバーの小規模で非公式なグループで既に決定されていた結論を承認しただけなのである。

そこで第3に、こうした内輪のグループの動向が重要になってくる。彼らは上級党指導者および最重要の中央委代表团（特にモスクワ、レニングラード、シベリア、北カフカース、ウラル、ウクライナの代表）の長たちからなる20—30人の有力な寡頭指導者たちであった。彼らは党の「実際的政治家」であり、内戦期に高い「軍事＝政治的」権威に上昇し、それ以来国の主要な地方と資源を支配下においていた。彼らのほとんどは、自分の考えをもたないスターリンの政治的創造物というのではなく、自分自身の名において重要性をもつ自主的精神をもった指導者であった。彼らは頭健で、プラグマティックで、第一義的に国内問題に関わっており、ソヴェト・ロシアを近代的工業社会に改造するという熱意に燃えていた。この願望は1927年の戦争の脅威によって強められ、1928年の穀物危機によって危うくされていた。ブハーリンとスターリンの闘争は、かなりの程度まで、これらの人々の支持をどちらが獲得するかという競争だったのであり、ここにおいては、機構政治だけでなく論点と「議論」が重要な役割を演じた。これらの寡頭指導者たちは、スターリンが精力的に利用したポリシェヴィムの英雄的伝統に感応しやすくなっていった。農民への一時的譲歩と工業の抑制の要求はどんなに思慮深いものだったとしても、右派の周囲に後退とペシミズムの雰囲気をつくりだした。工業的西欧に「追いつき追い越そう」と決意し、現下の危機に苛だった党寡頭指導者たちは、右派の「度しがたいペシミズム」よりも

スターリンの「楽天主義」を選んだのである。とはいえ、彼らは依然としてネップ志向の政策を支持していた。スターリンが反ブハーリン多数派をうちたて指導部の同輩中の第一人者になったのは、「上からの革命」のみこうみずな設計者としてではなく、むしろ、右派の怯懦と左派の極端主義との中間の「醒めた冷静な」路線を掲げた自称冷静な政治家として——つまり第15回党大会路線の真の擁護者として——なのであった。そののち、やってくるスターリンの「上からの革命」は彼らにとっても思いがけないことであった（以上、第9章）。

第4に、スターリンとの闘争以前に、ブハーリン派と左派との関係が問題になる。ブハーリンが1926—27年にその経済的プログラムを修正し、あたかも左派との講を狭めるかにもえたときには、左派は既に主要な反対と憤慨の的を対外政策へ移しており、この領域においては合意の機会はいっそう乏しく、激情はさらに高まっていった。ブハーリンの方も党内の敵に対して、非党員インテリに対してと同じだけの理解と寛容をもとうとはしなかった（第7章）。著者コーエンは、ここでも「党パトリオチズム」がわざわざいしたと言いたいようである。

## V

本書を読んだ感想を簡単に述べてみたい。本書は積極的にブハーリンを再評価する試みである。「著者まえがき」でも述べているように、コーエンは、トロツキーがスターリン以前の共産主義の代表的人物であり、スターリン以後の共産主義の先駆者であるという見解ならびにこれとも関連する、スターリン主義はポリシェヴィッキ革命の論理的な不可避の産物であった、という広く流布している見解に否定的である。著者はレーニン以後のポリシェヴィッキ革命を、主としてスターリン対トロツキーの対抗軸に即してみようという通常の解釈を修正しようと本書の中で努力している。このように、ブハーリンを積極的に評価する点ではコーエンの研究はモッシュェ・レヴィンの研究と共通するところが多い。1926年以降、ブハーリンは工業化についての自分の立場を修正したので、右派と左派の見解の相違点は小さくなったにもかかわらず、双方とも真の敵を見失っていた、と考える点はコーエンもレヴィンも共通している。こういうコーエンやレヴィンのソヴェト史のとらえ方にたいしては、if history だという批判もありえよう。しかし、筆者は、歴史には現実にあったものとは異なったコースをたどりえた可能性が客観的に存在したという、過去に関する反事実的の仮定を設定する方法に一定の有効性を認めるものである<sup>(3)</sup>。

著者コーエンは、ブハーリンを政治的敗北に導いた要因の一つとして、党内には事実上さまざまな潮流が存在するにもかかわらず、「一枚岩の党」のドグマにブハーリン自身しばられていたことをあげている。これは同じく西側の非マルクス主義的歴史家であるレヴィンの指摘するところである<sup>(4)</sup>。著者コーエンに言わせれば、「第10回党大会におけるレー

ニンの厳しい党の統一の決議は、こうした多様性の存在の承認であると同時に、それを抑圧しようとしたドン＝キホーテ的試みであった』<sup>(5)</sup>。この点は重大な問題を含んでいるが、問題点の指摘にとどめておこう<sup>(6)</sup>。

この本の長所は、非常に多くの文献、オリジナル資料を駆使してブハーリン像を明らかにしたことにある。ブハーリン研究では最も本格的なものである。そのうえ、従来、資料的制約により十分明らかにされていなかった1930年代のソ連に光をあててくれたのである。科学的社会主義の諸理論からスターリン主義の残滓を払拭し、マルクス主義を開かれた体系として創造的に発展させるためには、われわれはまず、このような西側の非マルクス主義政治学者のブハーリン研究から積極的に学ぶべきではないだろうか。

最後に翻訳について言えば、塩川伸明氏による翻訳は正確で訳文はこなれていて、たいへん読みやすい。本書では非常に多くの文献が引用され、その出典が注で示されているが、訳者は邦訳があるものについてはことごとくあたり、邦訳の該当箇所を指摘したり、その不正確さを指摘するだけでなく、実に多くの訳注を加えており、読者にとってたいへん有益である。この大部な書物（原書495ページ＋xvii、邦訳はA 4版上下2段組で505ページ＋42ページ）を翻訳された訳者の努力に敬意を表したい。

## 注

- (1) 守屋典郎『日本マルクス主義理論の形成と発展』青木書店、1967年、52ページ。
- (2) Moshe Lewin, *Political Undercurrent in Soviet Economic Debates : From Bukharin to the Modern Reformers*, Princeton, 1974, Chapter 12.
- (3) 齊藤孝氏は、歴史研究における反事実的仮定の設定の有効性を認めて、次のように述べている。「このような反事実的な仮定を設定する観点からのみ、歴史は教訓として生きるのであろう。……〔中略〕……すべてが、実際にあったようにしか起り得ないときめてかかるならば、恐らく歴史の岐路という問題は立てられないであろうし、歴史に学ぶということが出来なくなるであろう。」齊藤孝『歴史と歴史学』東京大学出版会、1975年、92—93ページ。
- (4) Moshe Lewin, *op. cit.*, p. 17.
- (5) 本書、168ページ。
- (6) 不破一田口論争はこの決議の理解にかかわるものである。